

---

# ムスタンゲ

坂田火魯志

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ムスタング

### 【Nコード】

N0270Z

### 【作者名】

坂田火魯志

### 【あらすじ】

爆撃機への護衛戦闘機として待望だったP-51ムスタングはあまりもの高性能故に何かと使われた。パイロット達は大変だったが戦後その彼等に贈られた言葉は。第二次世界大戦屈指の名機を書かせてもらいました。

## 第一章

### ムスタング

アメリカ陸軍航空隊には悩みがあった。

彼等はこの時イギリスから四発の重爆撃機 B-17 フライングフォートレスを使つてだ。ドイツ本土に戦略爆撃を行つていた。これはだ。

ドイツの力を凄まじい勢いで奪つていった。工業地帯や軍事基地の破壊だけでなくそこで働く者達がいる市街地まで攻撃したせいだ。その為にドイツの継戦能力はなくなるうとしていた。しかしだ。彼等はだ。あることに頭を悩ませ話し合つていた。

「損害が多いです」

「そうだな。多いな」

アメリカ陸軍航空隊の最高司令官でもある連合軍最高司令官アイゼンハワー元帥もだ。参謀達の報告にだ。苦い顔で応えた。今簡素な自室でだ。コーヒーを飲みながら自身の前に立つ参謀達の話聞いていた。

普段は百万ドルの微笑と言われる笑顔もなくだ。参謀達に言うのだった。

「三百六十機を出撃させてか」

「はい、六十機の損害です」

「六分の一です」

「多過ぎる」

軍の損害としてはあまりにも酷かった。

それでだ。アイゼンハワーは言うのだった。

「このまま損害を出してはだ」

「問題ですね」

「志願者も減ります」

「また市民の感情も反戦に傾きます」

「戦略爆撃そのものに疑問の声も出ます」

政治的な言葉も出て来ていた。

とにかくだ。損害が多過ぎるのだ。それでだ。

彼等は懸念をだ。次々に言うのだった。

「B-17は確かに重装備です」

「空の要塞の名は伊達ではありません」

「それに自動消火装置もあります」

「中々撃墜されない筈です」

「しかし撃墜される」

アイゼンハワーはこの現実を語った。

「それは何故かというのだな」

「ドイツの守りは堅固です」

「高射砲もさることながら」

戦車の砲にもなっている八十八ミリ砲だ。その威力はかなりのものだ。

だがそれだけではなかった。ドイツにあるのは。

「戦闘機が一番厄介です」

「機体の性能もパイロットの腕もです」

「バトルオブブリテンの頃から健在です」

「その彼等が必死に迎撃してきます」

「ですから」

「敵もさるものだな」

アイゼンハワーはこの言葉はこれだけに留めた。ドイツ系である彼は今はあえて感情を見せなかったのだ。余計な詮索をされない為にだ。

そうしてからだ。彼はこのことを言った。

「護衛戦闘機はどうなのだ」

「P-47ですね」

「サンダーボルトですか」

「あれは強い」

頑丈さで知られている。護衛戦闘機としては十分な強さがある。当然ドイツの戦闘機にも対抗できる。しかもその数はドイツ機を圧倒している。その戦闘機がいるのなら問題はないのではないかというのだ。

しかしだった。参謀達はこう報告したのだった。

「フランスへの爆撃の間はよかったです」

「オランダやベルギーまでもです」

「そこまではよかったですか」

「ドイツは駄目か」

アイゼンハワーは問うた。

「本土への爆撃の際は」

「航続距離が足りません」

「途中で帰らざるを得ないのです」

「ルール工業地帯への爆撃の際も難しいですが」

「東部となると最早」

「護衛は不可能です」

航続距離の問題だった。

「サンダーボルトが引き返すとです」

「敵は爆撃機に襲い掛かってきます」

「それにより損害が出ているのです」

「そこが問題です」

「敵も馬鹿ではない」

また言うアイゼンハワーだった。

## 第二章

「厄介な奴が去ってからだな」

「はい、それを狙って来ます」

「それで肝心の爆撃機を撃墜していきます」

「そうして損害が増えています」

「それが問題です」

「今度は我々がそうなたか」

アイゼンハワーの目は遠いものを見るものになった。

その目でだ。彼は言った。

「かつてのバトルオブブリテンではドイツ軍が航続距離に悩まされ  
たな」

「はい、ドイツの戦闘機は航続距離が短くです」

「ロンドンに来てはすぐに帰らざるを得ませんでした」

「そこで護衛のいなくなった爆撃機を襲うか引き返す戦闘機を襲っ  
ていました」

「ですがそれはです」

「我々も同じでした」

そうなっていた。敵と同じことはこちらにも起こるのが戦争なの  
だ。

「それが今です」

「今の我々の状況です」

「航続距離が問題です」

「護衛の」

「戦闘機を守る護衛がいなくては戦略爆撃が成り立たない」

果たしてだ。そこがどうなるかだった。

「何とかしなくてはな」

「単発の運動性能のいい戦闘機でなければ護衛戦闘機は務まりませ  
んし」

「これもバトルオブブリテンではつきりしていますし」

これもドイツ軍からだった。双発の大型戦闘機は当初航続距離等から爆撃機の護衛に向いていると思われた。だが運動性能のなさが問題になりだ。撃墜されていたのだ。

だからだ。アメリカ軍の誇る双発双胴の戦闘機P-38ライトニングは。

「ライトニングでは無理です」

「あれはあれでいい戦闘機ですが」

「爆撃機、しかも昼を担当するアメリカ軍の護衛はです」

「無理です」

「夜はイギリス軍だ」

この割り当ては動かせなかった。何故か。

「ランカスターを昼にやるとな」

「はい、お話になりません」

「フライングフォートレスどころの損害ではありません」

「武装は弱く装甲も薄いです」

「しかも遅いですし。そらを飛ぶ的です」

それで昼にドイツの空に行けというのはあまりにも酷であった。

「ランカスターは夜しかできません」

「夜ならイギリス軍のモスキートが護衛にできます」

「双発の戦闘機でも夜なら護衛はできます」

「しかし昼は」

「我々の担当する昼は」

そこが問題であった。とにかくだ。

彼等には護衛の戦闘機がいなかった。いてもドイツまで辿り着けなかった。それが結果として戦略爆撃そのものへの疑問とさえなっていた。

アメリカ軍は実際に暫くはドイツ本土への戦略爆撃は止めた。しかしだ。

それでもだ。それ自体を諦めたのではなかった。アイゼンハワー

はだ。

参謀達にだ。あくまでこう話していた。

「ドイツ本土にまで行ける戦闘機だ」

「フライングフォートレスを護衛できる戦闘機ですね」

「ドイツの奥深くまで」

「あるか」

それがあるかどうかであった。

「確か今面白い戦闘機が配備されてきているな」

「ああ、ノースアメリカン社ですね」

「あの細長いシルエットの戦闘機ですね」

「P-51ですね」

「確か名前は」

その戦闘機の通称はというと。

「ムスタングでしたね」

「あの戦闘機ですか」

「あれですか」

「あれを使ってみるか」

アイゼンハワーは言った。

「テスト飛行では性能も高く航続距離もかなりだな」

「はい、結果は出ています」

「実戦でもいい成績を残しています」

参謀達は口々にだ。そのムスタングについて述べていく。

「ですからムスタングを護衛戦闘機にすればです」

「爆撃機の損害も」

「わかった」

ここまで聞いてだ。アイゼンハワーもだ。

納得した顔になりだ。参謀達に述べた。



### 第三章

「ではムスタングを護衛にしよう」

「わかりました。それでは」

「すぐに」

こうしてだ。爆撃機の護衛にムスタングがつけられた。そしてだ。ドイツ本土への爆撃が再開された。すると。

長距離まで行くことができしかも高性能のムスタングの前にだ。

ドイツ機は。

相手にならなかった。しかも数が多い。こうなってはだ。

ドイツ機ではどうしようもなかった。爆撃機の損害は格段に落ちた。

このことに連合軍首脳部は安堵の言葉を漏らした。とりわけだ。アイゼンハワーはだ。満足した笑みでこう言うのだった。

参謀達と昼食を採っている。ステーキにマッシュポテト、そこにサラダやコーヒーがある。アメリカ軍ならではの見事な食事だ。

それを食べながらだ。彼は参謀達に言うのである。

「成功しているな」

「はい、ムスタングをつけたのは成功です」

「ドイツ機はムスタングの相手になりません」

「爆撃機の損害は目に見えて減っています」

「そして爆撃の成果もです」

爆撃機の損害が減ればそれだけ爆撃の成果が出る。だからだ。

成果もまたあがっていた。それは即ちドイツの国力が落ちることだ。

そのことについてもだ。参謀達は話す。

「このまま続ければドイツの降伏が早まります」

「ですからこのまま爆撃を続けましょう」

「是非共」

「そうだ。爆撃を続ける」

まさにだ。そうするとだ。アイゼンハワーも言う。

そのステークをフォークとナイフを使い切り口の中に入れて。それで。

食べながらだ。彼は話すのだった。

「爆撃の数も増やそう」

「では。爆撃機の数も出撃回数も増やして」

「ドイツを攻めていきましょう」

こうしてだった。アメリカ軍の爆撃はさらに激化していった。

出撃回数は増える。それは爆撃機だけではなかった。

護衛のムスタングのパイロット達もだ。出撃することが多くなっ  
た。

今日もだ。慌しくだった。出撃の用意をしていた。

「プロペラ回せ！」

「急げ！」

基地の中にだ。喧騒が響く。

「第七中隊全員揃ったか！」

「揃った中隊から機体を出せ！」

「全中隊出撃だ！」

「ドーバー海峡で爆撃機と合流するぞ！」

命令も次々に下る。その中でだ。

パイロット達もだ。ムスタングのコクピットに乗り込みだ。その  
うえで。

機体を滑走路に出してだ。誘導を受け次々に出撃していく。

そして合流地点であるドーバー海峡に向かいながらだ。通信で話  
をするのだった。

「今日も忙しいな」

「ああ、予定は決まってるのにな」

「どうしてもそうなるな」

「出撃はな」

急ぐからだ。そうなるのも当然だった。

その中でだ。彼等は出撃してだ。こんな話もするのだった。

「しかし。最近出撃自体が異常に増えてないか？」

「そうだよな。出撃回数がな」

彼等もだ。このことについて話す。

「そもそも出撃している数も増えたな」

「爆撃機が千いく時もあるしな」

「俺達も爆撃機の倍出ることもあるしな」

「少なくとも百機は出るからな」

爆撃機も戦闘機もだ。

「この前はムスタングが三百でフォートレスが四百か」

「それが三日続いたからな」

「俺達も連日出撃ってこともあるし」

「忙しくなってきたよ」

「全くだ」

こんな話をしてだった。彼等はだ。

ドーバー海峡でその爆撃隊と合流してだった。すぐにだ。

飛び方を変えた。上下にエスの字を描いて飛ぶ。アメリカ軍の護

衛戦闘機の飛び方になったうえでだ。護衛にいたのである。

そうしてドイツ本土に向かう。その飛び方の中でだ。

彼等はだ。さらに話すのだった。

## 第四章

「しかし。フリッツもしぶといな」

「ああ、これだけ爆撃を続けてもまだ降伏しないからな」

「結構以上に派手にやっつてるけれどな」

「戦闘機もまだまだ来るしな」

「だからだ。護衛戦闘機が必要になっているのだ。」

「彼等が出撃するのも当然のことだった。そういうことだった。」

「その中でだった。彼等は。」

「その目的地であるドイツ本土上空にきた。すると。」

「隊長機からだ。通信が入った。」

「いいか、来るぞ」

「ですね。ドイツ機がですね」

「来ますね」

「あと高射砲も来る」

「ドイツにあるのは迎撃機だけではない。高射砲もあるのだ。」

「戦闘機隊の下には爆撃機達がいる。その彼等を狙うものだが狙われるのは彼等だけではない。」

「隊長はだ。このことについても話した。」

「ドイツ機を追っている間に下に降りて撃たれるからな」

「ええ、わかってますよそれは」

「いつものことですからね」

「奴等も馬鹿ではないですから」

「そつだ、敵も馬鹿じゃない」

「戦っていればだ。実によくわかることの一つだ。」

「だからですね。それには気をつけて」

「敵を迎え撃ちますか」

「奴等を」

「レーダーに反応」

言ったすぐ傍からだ。報告が来た。

「右から八十、左から六十です」

「んっ、今日は多いな」

「いつもよりも」

ドイツ機は連合軍、とりわけアメリカ軍よりも数は少ない。国力の差だ。しかもだ。爆撃により国力がさらに落ちていてである。

ドイツ機も出撃できる数が減っていた。それでもだ。

今日はだ。その数が多かった。それでだ。

彼等もだ。警戒した。そのうえでだ。

「さて、また来るかも知れないからな」

「予備を置いて迎え撃つか」

「そうするか」

こう話してであった。そのうえで。

戦闘機隊の四割がだ。それぞれだ。

左右のそのドイツ機に向かう。戦闘がはじまった。

ムスタング達は上からだ。敵に向かう。

「いいか、このまま最初の一撃を加えてだ」

「そうしてですね」

「それからは」

「二機で一機に向かえ」

数をだ。ここでも使いだった。

「格闘戦に持ち込むぞ」

「ですね。運動性能でも負けてませんし」

「それなら」

こうした話をしてだ。そのうえでだ。

話通りだ。彼等は。

ドイツ機に上から一機に急降下を仕掛けてだ。それでだ。

何機か撃墜して。それから。

二機で一機にだ。仕掛け。

格闘戦に持ち込む。敵に左右から派手に回転しながらだ。

攻撃を仕掛ける。その都度だ。

ドイツ機は撃墜されていく。ドイツの空にパラシュートが次々と広がる。

そしてだ。戦闘機達に護衛されている爆撃機達は。

「こちら爆撃隊」

「このまま直進する」

こうだ。その彼等から通信が入りだ。

そしてだ。どうするかというと。

「爆撃コースに入る」

「予定通りいくぞ」

「ああ、いってくれ」

「この連中を蹴散らしたらそっちに戻るからな」

戦闘機隊からもこう返される。そうしてだ。

ドイツ機は退けられてだ。今のところ敵はいなくなった。そうしてだ。

爆撃隊は予定通り爆撃コースに入る。そのまま。

爆弾が落とされる。黒い弾丸を思わせる形のもものが次々と下に落ちていく。

そしてだ。眼下の工場群をだ。

次々と爆発させてだ。燃やしていく。それを見てだ。

戦闘機隊からもだ。会心の声があがった。

「よし、やったな」

「工場が燃えて爆発していつてるな」

「作戦は成功だな」

「後は帰るだけだ」

彼等はどうやってだ。そのうえでだ。

戦闘機の上に展開している。その彼等にだ。

## 第五章

ドイツ機が再び来る。しかしだ。

ムスタング達はまた迎撃に向かいだ。退けていく。彼等がいてだ。爆撃隊はほぼ無傷で作戦を成功させ帰投することができた。

だが、だ。作戦はだ。

この日だけではなかった。さらにだった。

次の日もまた次の日もだ。ドイツ本土への爆撃が行われる。その都度だ。

ムスタング達も出撃した。当然爆撃機の護衛にだ。

その彼等はだ。空を飛びながらだ。

その中でだ。彼等は話すのだった。

「今日もってなあ」

「流石に連日は辛いな」

「幾らローテーションで休暇はあってもな」

「こうまで出撃が多いとな」

「しかも近場じゃないからな」

イギリスからドイツだ。航続距離は充分でもだ。

やはり遠くまで出るのは辛い。それでだ。

彼等はだ。こう言ってぼやくのだった。

「フリッツもしぶといからな」

「ああ、絶対に迎撃に出て来るしな」

「確かにこちらの方が数が多くて」

それは大きい。とにかく数では圧倒しているのだ。

「しかも向こうは数は徐々に減っていつてもな」

「戦いだからな」

「辛いものがあるぜ」

ぼやきながらだ。彼等は出撃してだ。

爆撃機達を護りドイツに向かうのだった。

ドイツ本土ではいつも通りだった。迎撃にドイツ機が来てだ。

彼等がそれを退けて爆撃機は爆撃をして帰る。そうした。

爆撃機達は今日も損害が殆んどなかった。その成果もだ。

「今日もやったな」

「ああ、これでジェット機の空港はかなり使いものにならなくなっ  
たぜ」

「あの鬱陶しい奴等も空港がないと終わりだぜ」

「それに飛んでいないジェット機なんてな」

それならばだというのだ。

「何でもないからな」

「飛んで来られたら困る奴は飛んでいない時に潰す」

どんな戦闘機もだ。こうすれば終わりだ。

だからだ。連合軍は空港も重点的に狙ったのだ。そうしてだ。

今回はだ。そうしてなのだった。

空港を破壊したのだ。今回の作戦も成功した。無事だ。

そのことについてだ。彼等は話していく。

「ドイツ全土をステークにするのも時間の問題だな」

「そうだな、工場も町もな」

「全部焼け野原にしてな」

「戦争を終わらせようぜ」

こう話してだった。彼等は爆撃を続けていく。そんな爆撃隊のだ。

無事に作戦を終えて意気揚々とした話を聞いてであった。

彼等は彼等でだ。こう話すのだった。



## 第六章

「まあ連中は無事にやってるからな」

「俺達の任務は果たせてるしな」

「戦果もあがってるし」

「じゃあいいか」

「戦争が勝ちに近付いているならな」

それならよいとだ。彼等も納得しだしていた。

そしてだ。戦局はだった。

「ドイツ機自体も減ってるしな」

「国力は落ちているな、かなり」

「ああ、相当な」

「じゃあいいか」

こう話してだった。彼等の多忙について納得したのだった。

実際にだ。ドイツはこの戦略爆撃で国力を大きく失いだ。

それも大きく影響して敗れ続けた。遂には。

首都ベルリンが陥落し降伏した。勝利の後でだ。

アイゼンハワーはだ。宴の場でこう言ったのだった。

「戦争で役に立ったのはジープにバズーカ、原爆にC-47だった  
が」

「その四つですか」

「役に立ったのは」

「そうだ。この四つは大きかった」

最後のC-47は輸送機だ。それもあるというのだ。

しかしだ。それに加えてだった。アイゼンハワーはこうも言った。

「だが。戦略爆撃も大きかったな」

「あれですか、B-17の」

「あれですね」

「あれがないと戦争はより長引きそして辛いものになった」

そうになったというのだ。連合軍にとって。

しかしそのだ。戦略爆撃があつたこそからだとだ。

彼はだ。祝いの場で居合わせた者達に話したのである。

「非常に大きかった」

「左様ですか、戦略爆撃ですか」

「あれを使つて」

「しかしだ。爆撃機だけでは成功しなかつた」

「こつも言うつのだつた。」

「戦闘機もいてくれたからな」

「ああ、P-51ですね」

「ムスタングですか」

「ドイツ機は強かつた」

敵だつたからだ。そのことはよくわかつた。

「だが。彼等がいてくれたからだ」

「戦略爆撃は成功した」

「そつだというのですね」

「その通り。彼等がいてくれたから戦略爆撃は成功し」

「ひいてはだというのだ。」

「戦争は早く勝利に終わったのだ」

「そつですか。だからですか」

「ムスタングのお陰で、ですか」

「戦闘機とそのパイロット達のお陰だ」

アイゼンハワーは笑顔でこつも言うつ。

「まことにな」

「ムスタングとパイロット達がいたからこそ」

「戦略爆撃は成功し」

「ひいては戦いは早く終わった」

「そつなりますか」

アイゼンハワーの言葉を聞いてだ。彼等もだつた。

そのことを知つたのだつた。ムスタングとパイロット達のことを

だ。

その話を聞いてだった。ムスタングのパイロット達は。戦争が終わりアメリカに戻る支度を基地でしながらだ。それで言うのだった。

「こき使ってくれたよな、アイクは」

「ああ。連日出撃だったからな」

「護衛の仕事がなくても何かあればだったからな」

「忙しかったぜ」

「ワーカホリックだったんだけれどな」

「こう言うのだった。」

「それでも。まあな」

「俺達のお陰で戦争は早く終わった」

「そうなんだな」

「じゃあいいか」

この考えに至る彼等だった。

「戦争の勝利と終結に貢献できたんならな」

「それに生き残れたしな」

「それじゃあな」

「文句は言わないでいいか」

こんなことを言いながらだ。彼等は。

戦争が終わりもういる必要のなくなった基地を次々に去っていった。P-51ムスタングは第二次世界大戦でも最高の名機と言われている。その鮫を思わせる引き締まったシルエットは今も人気が高い。この戦闘機とパイロット達が果たした役割は非常に大きかった。爆撃機の損害は減りそれにより爆撃の効果もあがった。そして護衛戦闘機の役目以外にも活躍した。戦争を勝利に導いたのである。これこそが名機と言うべきであろう。

ムスタング

完

2  
0  
1  
1  
·  
9  
·  
4

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0270z/>

---

ムスタング

2011年12月1日00時48分発行